

競馬がますます
楽しくなる

続 ファンにやさしい

馬学講座

第35回

見た目も個性のひとつ 馬の毛色の不思議に迫る①

講師

楠瀬良さん
(公社日本養馬協会の
常務理事)



案内人：辻谷秋人
text by Akihiro Tsujiya

馬の毛色が
多彩な理由とは

「サラブレッドは美しい」というとき、その美しさの要素のひとつに毛色があることは間違いないだろう。黒光りする精悍な青毛や明るく輝くような栗毛。中にはたてがみや尻尾の長毛がことさらに明るい金髪の花栗毛などという馬もいて、サラブレッドの個性と毛色は切り離すことができないものになっている。

サラブレッドの毛色には、青毛、青鹿毛、黒鹿毛、鹿毛、柎栗毛、栗毛の茶色を基調にしたものに加え、加齢にしたがつて白くなっていく芦毛、生まれたときから真っ白な白毛がある。

さらにサラブレッド以外の品種に目を向ければ、河原毛、粕毛、月毛、さめ毛、ぶち毛といった毛色も見られ、馬の毛色のバリエーションは、ひじょうに多彩だといえる。

おなじみ馬博士・楠瀬良さん(日本装

削蹄協会)によると、これは馬が家畜化されたことと密接な関係があるのだという。

「馬のように肉食動物に襲われる動物は本来、敵に発見されないように目立たない毛色が望ましいのです。目立つ色の馬は、子どもどきに食べられて、淘汰されてしまう。ところが家畜化されることで事情が変わりました。飼い主である人間が珍しい毛色を好んだ。これは自分の持ち物を識別しやすくするためでもあったでしょうし、自分は他人が持つていない色の馬を持つているという優越感、満足感もあったでしょう。そこで、そうした馬を残すようになった。そのために毛色が多様化したと考えられます」

もちろん馬にとっても、目立つ毛色になっても人間が守ってくれるのだから、問題ないというわけである。

実際に古い骨のDNAを調べると、考古学的に馬が家畜化されたと考えられている6000年前頃から、毛色が徐々に多様化していることがわかるそうだ。

馬の毛色は
父母の毛色で決まる

では、その多様化した毛色の中で、なぜサラブレッドには、ぶちや河原毛がないのだろうか。

「サラブレッドはイギリス土着牝馬にアラブの種牡馬をかけたものですが、そのイギリスやアラブの馬の毛色は茶を基調にした単色だったので。サラブレッドという品種の元になった母集団が、毛色がぶちになるような遺伝子を持つていなかったということなんです」

さて、当然のように「遺伝子」という言葉が出てきたわけだが、毛色は遺伝で決まることは多くの人がご存じだろう。

馬の毛色はメンデルの法則による遺伝で決まる。つまり子どもの毛色は、父親と母親の毛色によって決まる、というわけだ。したがって、毛色によって親子関係が存在しないことが判明することもある(ただし、サラブレッドとして登録する際の



2014年菊花賞を制したトーホウジャッカルは金髪なたてがみと尾が美しい尾花栗毛だ

親子鑑定に毛色は使っていない)。

「現在ではDNA解析で、染色体のどこに毛色を決める遺伝子があるかもわかっています。以前は『実情を矛盾なく説明する遺伝子』を想定することで、遺伝のメカニズムを説明していましたが、その中で、おそらくもっとも有名なのが『栗毛の法則』でしょう。『栗毛(柎栗毛も含む)の両親からは、栗毛の子どもしか生まれない』というものです」

どうしてそんなことになるのか。今回はそのメカニズムを、じっくりと考えてみることにしよう。

